

自然誌 **だり** 秋

Natural history

三重自然誌の会情報誌 94 号

2012年 11月

津市栗真小川町国道23号沿いでシロマダラ

シロマダラというヘビがいます。黒とややピンクがかった白色のだんだら模様のきれいなヘビで、三重県レッドデータブック2005では「生態情報が不足のため、将来減少する可能性がある」として、準絶滅危惧種にされています。夜行性で人目につきにくいので、シマヘビやアオダイショウのように身近な生きものとしては認識されていませんが、本誌46号（2000年）に佐野明さんが津市河辺町のご自宅の前で死体を発見され、周囲の林から出てきたのかと推測しています。また、同じく本誌72号（2007年）で森脇武文さんが津市久居西鷹跡町のご自宅で死体を発見されています。このような報告を拝読して、けっこう住宅街にも生息しているヘビではと思っていたところ、もっと街中から本種の情報を得ることかできました。友人が津市栗真小川町の国道23号線沿いでクルマ屋をしており、補助金狙いで車を買換えようと9月25日に訪ねたところ、「ちょうど良いところに、さっき毒蛇が入ってきたんやわ」とみせてもらったのがシロマダラでした(写真1)。従業員のお兄さんが怖がるので殺したそうですが、まだ幼蛇で、近くで繁殖していることは明らかです。この付近は国道沿いには大型商店が林立していますが(写真2)、

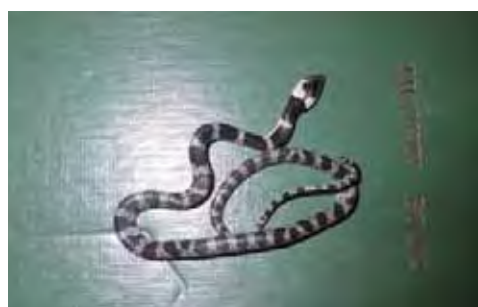


写真1 シロマダラ。2012年9月25日、津市栗真小川町

一步裏手に入ると民家があり、周囲には石垣や植え込み、耕作地などが見られます。このクルマ屋さんの裏手も畑になっており、一部植え込みもありましたので(写真3)、シロマダラはそこを中心に生活しているものと思われます。この子蛇、新天地を求めての旅が人目にふれてしまい、毒蛇とのあらぬ疑いをかけられて気の毒な最期となってしまったようです。



写真2 発見現場。正面の建物内に入ってきた。



写真3 クルマ屋さんの裏手に広がる耕作地

〈清水善吉：松阪市日丘町1386-17〉

ヒメウズラシギ

今 堀 聖 史

ヒメウズラシギは“毎年日本のどこかで数羽が観察される”と表現されていて、日本では稀な旅鳥である。目撃されるのは秋季で、ほとんどが幼鳥という。図鑑によると繁殖地はロシア北東端のチュコト半島、越冬地は北アメリカと記載されている。

体長は14～17cm、羽色はトウネンに似ているが、やや脚が長く、嘴が長い。特徴は、初列風切が長く尾羽より突出していること、胸の縦斑が蜜で白い腹との境が明瞭なことである。ハマシギやミユビシギより少し小さく、トウネンより腰高でスマートに見える。

鳥類図鑑の古典である日本鳥類大図鑑 増補改訂版（清棲幸保・著、講談社刊）のヒメウズラシギの記載内容の一部分に、『伊勢市の西を流れる宮川の河口近く、西に並行して流れる外城田川河口で、橋本太郎氏によって本種が初めて採集された（I・IX・1956）。本邦には迷鳥としてきわめてまれに渡来するにすぎない』とあることを高橋松人さんにご教示いただいた。本種と三重県にまつわるエピソードとして紹介しておく。



写真1 ハマシギ（手前）とヒメウズラシギ（奥）



写真2 ミユビシギ（前）とヒメウズラシギ（後）



写真3 ヒメウズラシギ

—珍鳥を見ることができたきっかけは羽色と嘴—

10月10日、渡りのシギ・チドリ類が見られなくなった香良洲の堤防に車を止め、浜辺の鳥をぼんやり眺めていた。ハマシギとミユビシギの近くにいる褐色の鳥が目にとまった。“この時期にしては褐色が濃い鳥だなあ。トウネンかな？”と双眼鏡で確認するとトウネンより嘴が長い。“種名が浮かんでこないあの鳥は何者？”と目の色が変わる。撮っておいて調べようと1時間ほど鳥の動きに合わせて、誰もいない静かな堤防を行ったり戻ったり。鳥を刺激しないように車窓から撮影し、鳥の姿勢をいくつか記録できた。

帰宅後に調べたが種名がわからない。図鑑を見ていた妻がつぶやいた“ヒメハマシギかも？”の言葉に翌日から1週間通ったが再び出会うことはなかった。先輩やフィールドで会うベテランに写真を見てもらったが疑問符がつく同定だった。シギ・チドリ類ハンドブック（文一総合出版刊）の著者である氏原巨雄さんに写真を送って「ヒメウズラシギ」と同定していただいた。

見たいと思ったこともない鳥に会えた偶然に感謝しつつ、季節外れでもしっかり観察する習慣をつけないと、見落としてしまう宝物があるという教訓を得ることができた。

〈いまほり せいし：津市久居小野部町1454-30〉

三重県におけるオクガタギセルの記録

中 優

陸産貝類キセルガイ科のオクガタギセルは、国内の陸産貝類を網羅した唯一の図鑑である1995年の「原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版」(東正雄, 保育社刊)によれば, その分布域は石川県白山～関東の山岳地帯とされ, 三重県には分布していないことになっています。また, 2002年の「生物多様性調査 動物分布調査(陸産及び淡水産貝類調査)報告書」(環境省刊)でも, 三重県における分布の報告は記載されていません。しかし, 少ないながら, 三重県におけるオクガタギセルの分布に関する報告があり, これまでに松本(1979)による「三重の貝類」(鳥羽水族館刊)の藤原岳, 2012年の太平洋セメントによる「藤原鉦山およびその周辺次期原料山開発事業環境影響評価書」に同じく藤原岳があります。

今回, 本会会員である上田利彦氏より譲り受けた陸産貝類の中に, 三重県3例目, 藤原岳以外では初記録となるオクガタギセルを確認したので報告します。データは次のとおりです。
オクガタギセル *Mundiphaedusa dorcas*. 2012年8月15日 亀山市安坂山町 上田利彦採集。

なお, 本個体と同時にイブキクロイワマイマイも譲り受けたので併せて報告しておきます。最後になりますが, 貴重な個体および生態写真を提供いただいた上田利彦氏に感謝します。



写真1 現地でのオクガタギセル



写真2 オクガタギセル

〈なか まさる：伊勢市小俣町本町1284〉

会員の本

「済生会 明和病院周辺の植物」 津村 みち 著

A5版 147頁, オールカラー 2012年9月, 個人刊 非売品

津村さんが海藻について調べてみえるのは知っていましたが, 植物にも興味をお持ちであったのは, 不覚にもこの本を出されるまで存じていませんでした。2004年4月にこの病院に赴任され, なんて草の多いところなんだろうと驚いたこと, また, 数年のうちにこのあたりの景観はすっかり変わっていくに違いないという予感が, この本が世に出されるきっかけだそうです。カメラを手に周辺を歩き, 撮り貯めた写真のなかから植物239種, キノコ18種を紹介しており, この時代の伊勢湾沿岸の集落付近の植生の一端を記録する貴重な資料となっています。惜しむらくは, 「お世話になった人に配る」ためにつくられたとのことで, 発行部数がわずかであることです。今回, 著者のご厚意により3冊を会に寄贈していただきましたので, 入手ご希望の方は事務局までご連絡ください(先着順)。



砂浜で蜘蛛を狩るアカゴシクモバチ

篠 木 善 重

津市河芸町の砂浜で、海浜植物の株周りをせわしなく動き回る体長1 cm前後の黒いハチを見かけることがある。そのハチの腰のあたりが赤ければ、蜘蛛を狩るクモバチ科のアカゴシクモバチ *Anoplius reflexus* (Smith) でまず間違いない。卵を産み付け、幼虫の餌とするため、徘徊性のハエトリグモやコモリグモ類の蜘蛛を探し求めて、海浜植物の株から株へと足早ではあるが結構ていねいに調べているようすがうかがえる。

本種の三重県での記録は少なく、西田ら（2011）による志摩市浜島町の記録だけであろう。筆者は一度だけではあるが、本種が蜘蛛を巣穴へ運び込むようすを観察している。また、若干の標本も得ているので併せて報告する。

■ 観察

津市河芸町中別保地区の豊津海岸で2010年10月24日午前11時20分、さきほどまで植物の株周りを動き回っていた本種がハエトリグモ科のヤマジハエトリ *Asianellus festivus* 雌を捕まえて、筆者の目の前に現れた。蜘蛛は麻酔がすでに効いていると見え、全く動かない。その1時間40分後の午後1時過ぎに約20メートル離れた場所（写真1）で、本種はようやく巣穴を掘り始めた。

その間、本種は蜘蛛の胸元あたりを大顎でくわえて必ず後退運搬した（写真2）。障害物があっても後退しながら乗り越えていく。運搬の途中で何度も蜘蛛を置いたまま進行方向の前方に出かけて行ってなかなか帰ってこないことがある。あちこちと動き回っている本種のようにすから巣穴を掘る適当な場所や運搬経路を探し回っているように思えた。蜘蛛を砂上に置いたまま出かけることも数



写真1 アカゴシクモバチが営巣場所に選んだ砂浜のようす。コウボウムギと帰化植物のオオフタバムグラが生え、チガヤも群生している。2012年7月7日撮影



写真2 ヤマジハエトリ雌の胸元あたりをくわえて後退運搬する。



写真3 狩った蜘蛛をオオフタバムグラの草上に引き上げる。



写真4 蜘蛛を運ぶ途中で、口元まわりなどを手入れする。



写真5 前脚だけを使って巣穴を掘る。



写真6 アカゴシクモバチに狩られたヤマジハエトリ雌。

回あったが、オオフタバムグラの草上に引き上げてから（写真3）出かけることも二度あった。10分以上戻ってこないときもあったが、ちゃんと蜘蛛の置いてある場所に戻ってきた。

運搬途中で、運ぶ作業を休止して体の身づくろいをするような行動をとることがあった（写真4）。

蜘蛛を近くに置いて巣穴を掘り始め、前脚だけで砂をかき出していた（写真5）。掘り出した砂が巣穴の前にたまってくると、後退しながら前脚で砂を後方へ跳ね飛ばしていた。掘る作業を中断したまま、30分以上も出歩いて戻ってこないことがあった。

巣穴が未完成であるにもかかわらず、近くに2ヵ所（一つは50cm離れた所、もう一つは1m離れた所）で新たな巣穴を掘りだした。2ヵ所とも奥行1cm足らずの浅い穴であった。他にも数ヶ所で巣穴を掘る仕草をした。本物の巣穴を悟られないようにするための偽装工作でもしているのかと勘繰られるが、だまそうとしている相手は誰なのかなどハチの真意のほどは分からない。

午後2時20分過ぎ、蜘蛛を捕まえてから3時間経過したが、まだ巣穴を掘っている。捕まえられたヤマジハエトリ（写真6）はその3時間あまりの間、ずっと腹面を見せたままであった。

昼食もとらず、ここまで観察を続けてきた筆者も空腹に耐えかね、いったん砂浜を後にした。そして2時間後に巣穴を訪ねると、巣穴は封鎖されていなかったが本種も蜘蛛も姿を消していた。巣穴の中で本種が蜘蛛の体に卵を産み付けているのか確認しようかとも思ったが、本種が巣穴づくりに要した時間と労苦を考えると巣穴を壊してまで調べる行為は残酷に思えて思いとどまった。

■採集標本

アカゴシクモバチ *Anoplius reflexus* (Smith)：津市河芸町芦原海岸，1♀，24—VI，2008；河芸町一色豊津海岸，1♀，19—VII，2009，津市河芸町中別保，1♂，9.V，2010，津市河芸町中別保豊津海岸，1♀，27.VI，2010，津市河芸町田中川干潟；1♀，16.VII，2010。

これら5頭の標本はすべて筆者採集。三重県立博物館に寄贈する予定である。

謝辞

種の同定をしていただき、県内の採集記録について情報を提供していただいた川添昭夫氏に厚くお礼申し上げます。

文献

清水 晃2008. クモバチ（ベッコウバチ）科. 新訂原色昆虫大図鑑 第三巻：p.563-573，北隆館。
西田悦造・川添昭夫2011. 志摩半島のハチ目. 志摩半島の昆虫：p.196-203，三重昆虫談話会。

〈しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1〉

揖斐川河口汽水湿地の植生

市川 正人・山本 和彦・山脇 和也



写真1 汽水湿地



写真2 ハマアカザ



写真3 ハママツナ



写真4 ウラギク



写真5 ゴキヅル

桑名市福岡町の揖斐川河口右岸側には新堀川の河口域があり、海とは堤防を境にして約100m²の汽水湿地が見られます。小規模な湿地ですが、ここで観察できる植生について紹介します。

海岸線には強固な護岸堤防が設置されているこのあたりでは珍しく、当湿地には三重県レッドデータブック2005(RDB)の記載種が4種類も生育しています。そのなかでも、ハマアカザの生育は注目に値します。この場所は、揖斐川の堤外で川から漏水が流れ込みよどんでいるところで、水は外見的に決して綺麗とは言えません。秋口にはたびたび酸欠状態になり、ボラなど汽水域にも生息する魚の大量死も見かけます。真上を伊勢湾岸自動車道が通っており、その橋梁下にはイソヒヨドリも営巣しているようで、そのさえずりや姿を確認しました。2012年8月現在、揖斐川河口部では堤防補強工事が進行中ですが、いまのところ湿地に直接の影響はないようです。

この湿地は松阪市の松名瀬海岸や津市の田中川河口に比べてかなり小規模ですが、こんな所にこんな植物がという驚きがあります。また、北勢地域で海浜植物が観察できる四日市市の吉崎海岸や川越町の高松海岸とは異なる環境下での湿地植生が観察できる場所です。

今年の夏に生育を確認した植物は以下のとおりです。

在来種：ハマアカザ(RDB絶滅危惧ⅠB類)、ハママツナ(同準絶滅危惧)、ウラギク(同絶滅危惧Ⅱ類)、ゴキヅル(同絶滅危惧ⅠB類)、イソヤマテンツキ、シオクグ、アキノミチヤナギ、ヨシ。帰化種：ウシオハナツメクサ、ホウキギク、ヒロハホウキギク、ホコガタアカザ、ヤノネボンテンカ、ツルマンネングサ、アリタソウ

なお、数年前にはウラジロアカザも観察できましたが、現在はみられません。植生は年により大きく変化(増減が激しい)することが継続調査からわかっています。

〈いちかわ まさと：四日市市堀木1-4-5文化ハイツ606、
やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町12-10、
やまわき かずや：桑名市山の手通155-1-107〉

紀宝町の着生ラン科植物と被着生植物について

長谷川 好 昭

樹木やイワヒバの仮根に生えるランを着生ランと呼び、着生ランの根は樹木の表面に張り付いている。しかしながら、ヤドリギ（寄生植物）のように養分を奪うことはなく、気根性植物の特性で根から大気中の水分や根の回りの苔等から栄養分を取りこんだりする。根は直接大気にさらされるので、根の外側は白くスポンジのような組織で乾燥から守られている。また、被着生植物とはランが着生している宿生を言い、樹木であることが一般的であるが、イワヒバのようなシダ植物の場合もある。

紀宝町において、若干ではあるが着生ラン科植物と被着生植物について観察したので報告する。セッコクは紀宝町の1地点、ムカデランは紀宝町の2地点、ボウランは紀宝町の3地点で確認した。観察記録は以下のとおりである。なお、()内は被着生植物を示す
セッコク *Dendrobium moniliforme* L.

2009年4月12日、2012年6月2日(写真1)、紀宝町神内A地点、多数(オガタマノキ、ホルトノキ、イワヒバ)

ムカデラン *Sarcanthus scolopendrifolius*

2011年3月20日、2012年6月2日(写真2)、紀宝町平尾井B地点、多数(オガタマノキ)；2011年3月20日、2012年8月3日(写真3)、同C地点、小数(イロハモミジ、イヌマキ、カキノキ)

ボウラン *Luisia teres*

2011年3月20日、2012年6月2日(写真4)、紀宝町平尾井B地点、多数(オガタマノキ)；2011年3月20日、2012年6月2日、同C地点、小数(イロハモミジ)、2011年6月5日、同D地点、多数(オガタマノキ)

和歌山県では新宮市速玉大社のオガタマノキに着生するボウランや古座川町一枚岩のイワヒバに着生するセッコクが有名であるが、このように三重県南部でも観察することができる。

〈はせがわ よしあき：鳥羽市鳥羽1丁目23-4〉



写真1 セッコク、2012年6月2日



写真2 ムカデラン、2012年6月2日



写真3 ムカデラン花、2012年8月3日



写真4 ボウラン、2012年6月2日

会員の本

「ムシの考古学」 森 勇一 著

A 5 版, 237 頁 2012 年 8 月, 雄山閣 定価 2520 円

著者の森さんは昆虫少年だったそうです。長じてからは、そのフィールドを野山から遺跡や化石の発掘現場に変えて昆虫採集を続けられ、「ムシの考古学」という新分野を確立されました。すべての生き物は環境に依存した暮らしをしています。昆虫はその傾向がとくに強いグループです。遺跡から発掘されるムシたちの面々は、例えば弥生時代の終末期の地層から発見されたギリギリの産卵管が集落の終焉を物語っているなど、当時の環境や人の暮らしを再現してくれます。野山での昆虫採集は今のムシたちしか得られませんが、遺跡からは今はなくなったムシたちも得られますので、きっと楽しいことでしょう。ただ、得られる虫たちはほとんどが断片ですので、きれいな標本を集めたい人には向かないかもしれません。虫、環境、考古等に興味のある人それぞれが、異なった読み方のできる本です。著者は桑名市在住ですので、三重県や東海・近畿地方の発掘現場の話題も豊富です。



森さんのご厚意により、本会会員限定で 2 千円（送料込み）で入手できますので（1 月末日まで）、同封のチラシの方法によりお申し込みください。

事務局から

○鈴鹿青少年の森湿地の整備作業のお知らせ

本誌でも何回か紹介した鈴鹿青少年の森内にある湿地の整備、つまり草刈り作業を下のように行います。お手伝いをしていただける方は事務局までご連絡ください。毎年 1 回、冬に草刈りを行うことにより、湿地植物はとても元気になります。今年もシラタマホシクサが湿地いっぱいに花を咲かせました。

日 時 1 月 20 日 (日) 10 時～12 時 30 分 持ち物 軍手、長靴

内 容 草刈機で刈った草を集めて運ぶ作業です。

○会報「自然誌だより」、会誌「三重自然誌」の原稿募集

会報次号は 2 月発行予定ですので、1 月末までお願いします。また、会誌については、現在は発行できるほど原稿が集まっておりませんので、ふるってご投稿ください。

○2013 年会費の納入をお願いします。

本会の会費は前納制となっておりますので、2013 年会費納入の手続きをお願いします。また、退会される方は面倒でもご連絡をお願いします。

編 集 後 記

会誌がなかなか発行できません。いくら不定期刊行といっても 2009 年刊行が最新号では寂しすぎます。なんとか今年度中に次の会誌を発行したいと思いますので、原稿執筆・投稿をよろしくお願いします。一方で本誌には、いろいろな生きものの情報が集まるようになってきたのは嬉しい限りです。とにかく、自然に関するさまざまな情報を記録に残していきたいと考えていますので、お気軽にご投稿ください（善）。

自然誌だより 94 号

発行日 2012 年 11 月 30 日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町 1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500 円（個人）/2,000 円（家族）

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp